

研究部 原本

昭和二十年年度（昭和二十一年一月—三月）研究報告 其三

成人向 日本語教材

第三期用 說話系列教材

財團法人 言語文化研究所研究部

（編纂擔當者） 研究員 今井 三 明

教養としての日本の説話

研究員 古井三郎

目次

神話	一	天地開闢の語	奈良	古事記	日本書紀
寓話	二	八岐の大蛇	奈良	古事記	日本書紀、古語拾遺
傳説物語	三	雀の思	鎌倉	宇治拾遺	
	四	猫の思	室町	俵然草	
	五	田舎の茶人	江戸	雲津雜志	
	六	道場法師物語	平安	日本靈異記	
	七	遠く探	平安	大和物語	萬葉集
	八	善長老の籠	鎌倉	十訓抄	陸日本記
歴史説話	九	西八條の風	鎌倉	平家物語	源平盛衰記
	十	最後、希望	室町	太平記	増鏡
	十一	浦島	奈良	風土記	萬葉集
	十二	かや姫物語	平安	竹取物語	源氏物語
御伽説話	十三	羽衣	室町	謡曲百番	風土記
	十四	一寸法師	室町	御伽草紙	
	十五	金鍋	江戸	諸國歌	

研究部保存用

神話 天地開闢

一 古事記

天地の初の時、高天原に成りまざる神の御名は、天之御中主神、次に高御産巢日神、次に神産巢日神。此の三柱の神は、結独神成り坐して、御身を隠したまひ也。
次に國稚く浮脂の如くして、くわに浮す漂よへる時に、葦原の如く騰る物に因りて、成りまざる神の御名は、宇麻志阿斯訶備比古迩神、次に天之常立神。此の二柱の神も独神成り坐して、御身を隠したまひ也。

上の件、五柱の神は、別天神

次に成りまざる神の御名は、國之常立神、次に豊雲野神。此の二柱の神も独神成り坐して、御身を隠したまひ也。

次に成りまざる神の御名は、宇比地途神、次に妹須比智途神、次に角杵神、次に妹治杵神、次に意富斗能地神、次に妹大斗乃辨神、次に妹母陀琉神、次に妹阿夜訶志古泥神、次に伊邪那岐神、次に妹伊邪那美神。

上の件、國之常立神以下、伊邪那美神以前、并せて神世七代と稱す。

た、海方、ありまして、天之御中主神と申さぬまゝに。次に此の天地本
 源の中心世界を考め、然らば天之御中主神の、周辺の世界にまゝありて、
 天地の働きを司らる神格に、高皇産靈神と申さぬる海方と、神産
 灵神と申さぬる海二方の神格がござぬまゝに。此の産灵神格は、天
 之御中主神の、辨産神と申さぬる海方で、動と反動、柔と剛と言
 つた、対立の世界を二分せられ、司られ、以て宇宙萬物の
 創造化育に當らせられたのであります。此の三柱の神は、皆独り身の
 上に、其の御身体は、幽身（かみりみ）と申さぬまゝに、身を隠し給うて、御現は
 く、ありませぬでござた。

此の頃、天地未だ、天と指すべき所も地と定むべき所も無く、陰の
 姿も陽の働さも分れず、ぬるく、人全く渾沌として居ました。其れは恰
 鶏卵の白身と黄身が入り混つて、どろどろとした状態を成して、ぬる
 の上、異子卵が、ありませぬでござた。然らば卵から雛が、鵝の子孫に、やがて
 其の世界は、萬物を生成するに至る微候を備へ、あるてあります。

ですから、其の清く澄んで紙なるものは、清く變遷して天となり、重く
 濁つて混ざつたものは、自然と凝り固まつて地となる様にござりました。が、
 清明な浮薄体は、集合し易いが、重濁な凝集体は、中々固まり
 難く、かつたのでした。それでも、何時か、天が先づ出来て、後に地が固まり
 化され、下行せました。そして其の後に、諸々の神格が、漸く出現になり
 ました。

古典は、天地の開け、始めの折に、宙に浮く漂つてゐた國土の存
 様は、丁度、油脂が水上に浮んでぎよろくろ、海月が潮水に浮
 いてふはく、漂ひ流され、ぬるくと、同様の物であつたと、託して居
 ます。

此の浮脂の様なもの、中から、一つの物が芽生へて、参りまゝに、
 其れは、草木か、草の様なものでした。其れが、海方に生長して

入りますと、即ち、天常立神・國常立神と申し、天上界の無窮の時間性を司り、地上界の永遠の時間性を司る二神と成つたのであります。此の神も、独り身の幽身の神様でした。

其の常立神の次に、初め下陰陽の性格を徴括したつた、田力女の神が、出現に成られました。先づ天地が、泥沼の様な状態と成つて来た時に、出現なさいました男神を宇比地通神と申し、女神を須比地通神と申しました。續いて、天地のけじめが分明に成つて来た時に、角式神と、造杖神が出現になりました。次に、天地は抗なりとか、大きさを持つ格になりました。其時の二神を、大斗乃地神と大斗乃辨神と申します。次に、物の充足の司の男神、面足神が生れ、心の滋徳の司の女神として、惶栲神と言ふ造方が出現になつて、天地の物に二界は安定して入りました。

天地の開闢は全く神秘でござりますが、斯様な考案で、神々の世界は愈々賑やかになつて入りました。

次に、萬象誘導の神である、伊邪那岐、伊邪那美、造二柱の神が出現遊ばされました。

先の天地の常立神の時代から後、岐、美二神迄の時代を、造二神世七代と申します。

或時、天神にまゝです。造化の三神が、岐、美二神に、大命を漸降にたゞり、日之、漂蕩つてある國を修理り固北め成せと申され、水の瀝了称な天瓊矛を添へて漸授けになり、漸依托遊ばされ、たのでござぬます。瓊は玉とすなり、天瓊矛とは、玉の飾られた鉞とす。靈妙な神器であつたのです。

二神は、謹んで漸命を漸授けし、口官修理固北の由事

勵ませられたりていざねます。言天系と現實界に渡して長々と
けられた、天孫橋を渡つて、やがて其の中央の淵に立ちました。
雲海の根に群がる天雲の上に、あつかりと懸けられた天孫橋
立たせ給うた二神の御姿は、壯麗其物とありました。颯然と
る其の御容女は、天地の大事が將に行なはれようとしてゐる事
を、言はずと物法つてゐるのてうた。

威嚴に立ちた律として、御姿の伊邪那岐尊は、髪を淵頭中央
から左下に流し、その重髪を御耳の少し上で巻き挙げ給へ。
又、満面慈愛に溢れ給う伊邪那美尊は、静かに思髪を其
儘背後に垂れさせ給うて居られますが、淵二方共和柄の紙白
衣服を、刀さして居て、神々しい限りて居た。

伊邪那岐尊は、しばらく下界の御姿を調へて居られますが、
さうばいぞ、茲に國をみまをさん。と仰せられた天孫尊は

執つて、やがて指く下界、静かに揺り廻るまゝ、下界に
かゝる星の一圈を、廻る様に、キラキラと光り随う大なる渦を巻
廻轉し始めたのであります。

やがて、其の中心から、天孫尊を引寄せ、あけられますと、矛の
ら、油の標を潮が、ほたりく、と滴り、と、あつかりと行つて、天孫
村の、まゝなり、まゝなり、と、海の一瀬、島と成りました。

まゝなり、まゝなり、と、伊邪那美尊は、微笑を、まゝなり、見詰めて、
ました。伊邪那美尊は、天神の御姿の儘に、國を修理り給
た。さうく、と、あつかりと、成つたが故に、激取處島と申さん。と、
給へ、あの島に天孫尊、御姿を、造つ、國を固化せられた。と、
朗々面指して仰せ出された。

さうく、浮橋を降つて、島に出てさせ給うや、天之御孫を大

にお立てられ、広太な八尋殿を御造業述べきり、茲には
美二神、依りて、娘を、宿庭の御堂に始りて行つたのであ
ます。

三二六 三册記

八、岐の大蛇

誓約に勝荒んが無状の振舞に神威を犯す神天を活した素戔嗚尊
は、天つ神の叱責を受け、高天原を追放され、出雲の斐伊川の鳥發の地に
廻り着きまゝた。

谷川の清流を眺めて居られた尊は、我身を省みて、亂行の非を悔ひ、
身に染みる彌陀の宿を感せずには居られませんでした。暫く休んで居居
ると、川上の方から一本の箸が流れ来てました。尊は、此の川上に人が居る
と、流石に成つて川添に廻つて居居るに、一人の翁と一人の姫が一人の娘を中
居て注いで居ました。尊は、お前達は何故泣くのか。名前は何と申す者か。と、お
尋ねになりました。翁は、私共は國つ神大出見の子と孫で、私は足名稚、妻は
子名稚、娘は神名田姫と申す。私共には本八人の娘がございまして、丁度八
年前に古志の八岐の大蛇が来て、娘を一人食ひ、其水も一年々一人宛食つて、今
此の子一人だけになつてしまひました。其水を、天今年も大蛇が来る時節になりま

「たので、かうして毎日泣き悲しくんで居るのでございませう」と申すました。

尊は「八岐の大蛇とはいふな形をいふか」と言ふすねにたがりますと、「其の大蛇の目は酸漿水の森に集るに類き、一つの胴は八つの頭と八つの尾があり、体には岩を食へる檜や杉の木も生んでゐる、八つの山谷に渡り長ツノ大蛇でございませう。これに腹を見ますと、血に塗れ、爛れ切つて居ます」と申すました。

尊は男安あて居らしたたが、公卿は「父那の娘であるなり、此の如くは男安あていかに申すました。公卿は「為山多し事わすべし、流石所を存じませぬのぞ」と申す。

尊は「おは天照大神の弟で、今高天原から降りて来たか」と申す。公卿は「是れは天照大神の弟で、今高天原から降りて来たか」と申す。公卿は「是れは天照大神の弟で、今高天原から降りて来たか」と申す。

尊は「おは天照大神の弟で、今高天原から降りて来たか」と申す。公卿は「是れは天照大神の弟で、今高天原から降りて来たか」と申す。公卿は「是れは天照大神の弟で、今高天原から降りて来たか」と申す。

尊は「おは天照大神の弟で、今高天原から降りて来たか」と申す。公卿は「是れは天照大神の弟で、今高天原から降りて来たか」と申す。公卿は「是れは天照大神の弟で、今高天原から降りて来たか」と申す。

いふ酒をのんで待つて居なさい」と。

夫婦の神は流石の通り酒船を飾へて置きました。剛も存じ公卿の言つた通り、八岐の大蛇がやつて来た。大蛇は酒船に頭を突き、其の酒を飲み干す。

大蛇は酒船に頭を突き、其の酒を飲み干す。大蛇は酒船に頭を突き、其の酒を飲み干す。大蛇は酒船に頭を突き、其の酒を飲み干す。

大蛇は酒船に頭を突き、其の酒を飲み干す。大蛇は酒船に頭を突き、其の酒を飲み干す。大蛇は酒船に頭を突き、其の酒を飲み干す。

大蛇は酒船に頭を突き、其の酒を飲み干す。大蛇は酒船に頭を突き、其の酒を飲み干す。大蛇は酒船に頭を突き、其の酒を飲み干す。

大蛇は酒船に頭を突き、其の酒を飲み干す。大蛇は酒船に頭を突き、其の酒を飲み干す。大蛇は酒船に頭を突き、其の酒を飲み干す。

大蛇は酒船に頭を突き、其の酒を飲み干す。大蛇は酒船に頭を突き、其の酒を飲み干す。大蛇は酒船に頭を突き、其の酒を飲み干す。

大蛇は酒船に頭を突き、其の酒を飲み干す。大蛇は酒船に頭を突き、其の酒を飲み干す。大蛇は酒船に頭を突き、其の酒を飲み干す。

水邊にたつた木、山紫水明の須加の地に滋着きになりました。おら。此れは良
地だ、わしは此處に來て、清々しい心持に成つた。と仰せられ、其の地、宮殿を造り
造り、榊石田徑と父の神を造り、此の地になつて、御住居になつた。其の地
今も、
尊は其れを造り、其の地になつた。其れが、
八重立つ、出雲八重立つ、妻隠に
八重立つ、其の八重立つ
と言ふ、三十一、三十一、わが歌でいひます。

古事記、日本書紀、古語拾遺

三四三、三の記

雀の恩

或長閑な春の日でした。一羽の雀が庭に降りて、頻りに
食物を渡つて居ました。

すると、「ひゆつ」と云ふ飛んで來たかと思ふと、其れが雀に為
りました。雀は飛立とうとくまされたが、腰を折られてくましました
で、「ばたん」と羽撃きつゝ居る許りでした。近所の子供が
投げた石に運悪く當つたのでした。

雀は不自由な体も可憐い脚に托して、鳴乍ら庭の隅の方
へ逃げやうとくまされた。

此家のお婆さんが見附けて、可愛想に思ひ、急いで行つて
捕へて籠に入れ、お米を食べさせ、やら、お茶をくもやら、
水を飲ませ、やらして大事に飼つてやりました。

お婆さんは、毎日、雀の心配で、仕事も午に暮かぬ位

でくた。

千日も飼ふと、雀は大分嬉しくつたと思得て、お波さんの姿を
見させるすまじと、「ちう／＼」と呼び止める程でした。

一月も経つと、腰も大分直つたと見得て、羽撃ソイ元気に
啼く様になりました。

或日、お波さんは、雀を籠から出して、飛立てもかどつか
手の上に載せて見ました。すると、始めはふう／＼と居ま
ゝたが、其の中に静かに飛んで行つて、お庭の楓の木に止
つて居ました。が、「ちう／＼」と二声三声別れを惜んで鳴
いたかと思ふと、向かふの竹藪の方へ飛んで行つてしまひま
した。

其日から、二十日程も経ちました。か、楓の木で雀が頻りに呼
ぶ声おきますので、お波さんは、「聞覚えのある声だが、あれが
帰へつて来たのかな」と思つて、櫓先に出て見ますと、やはり
、羨みつてやつた雀でした。「まあ、亡くならぬ、帰つて
来たものだ」と懐かしくさうに由りますと、雀も親しくさうに、
お波さんの顔を見て居ました。口の中から兩路程の物
落ちて、又飛去つてしまひました。お波さんは、「あれは、
何だうら」と思つて、拾つて見ますと、其は瓢の種でした。
「あの雀が折角持つて来て下れた種だから」と、其は白鳥
の良い畠へ時きました。

一夏中、大きな縁起書おを聞いて、日光を元分浴びて居る
瓢も、秋になりますと、珍らしい大きな安房かどつさり生れま
お波さんは、大喜びで、近所の人や里の親類の人にも分けてやりま
した。庭でも、朝晩孫達を嬉め皆がどつさり合へました。終ひ
に、中にも秀水で大きな七八つ残して、種を取り、

と思つて、其儘置き置きました。秋風が吹く境になつて来ると、色に色附いて大分固くなりなつたので、「もう良からう」と、取
て、口を開けますと、中にどつさり何か入つて居ました。石馬湯
に思つて、桶に明け見ますと、何と其水は、目も覚めぬ程な白
米でした。「此水は徒事でも無い」と、びびりなりました。「雀の
仕業に違ひない」と思つて、大事に仕舞つて置いて、お米が無く
こは、出よと来て合へました。

どの瓢からか、山銘白米が落ちて来たので、お婆さんの家は、大
盡になり、何時も明るく家中の者が一層朗かになりました。
此のお婆さんの隣に、若くて年取つた波女さんが住んで居ました。
お隣が大盡に成つたのも、大変苦しく思つて、「自分も一つ雀を
助けてやつて、赤六を助けてやう」と考へました。其處で、腰折れ
を見附けようと思つて、目も、はちくりさせながら、竹藪の彼方

此方を見附け歩きまわりましたが、見附かりません。一寸た。黄白
近くしをく、家へ帰つて見ますと、裏口の井で、赤六の者が、
零ひれた米を啄ばんで居ました。其處で、石を牛平一ぱい握つて
投げ附けました。皆、「ばつ」と逃げました。一羽だけ飛べな
「おたく」くる居ました。石が当たつたので、石を占めた。と、駈けて行つて
捕へました。

早速籠にのり、米や茶や水を與へて養つてやりました。「然る、一羽た
けは一つの程も得られない」と思つて、又裏口へお米を少し撒いて置
いて、石を投げ投げつて、又二羽捕へました。「これが大盡に成れる」と喜
びました。

一月も飼ひますと、皆赤毛になりました。瓢の程を打つて来たよ。と
言つて放しました。そして、今日は来るか、明日は呼ぶか、と待つて居ま
すと、十日許して、三羽の雀が揃つてやつて来ました。「瓢の程を打つて

居るから」と思つて、見ると、釜は街へて居た程と落して、靴人で行つてしまひました。

波女さんは、闇章で、拾つて、三所に廿時と、まゐりました。

程に成りますと、鈴り大ききはないか、一本の葛又、七八つ宛ふりつと、まゐりました。「これは思ひより少くないから、人には遣ふまい」と思つて、誰にも遣ひませんでした。

待つて居た子供達は、「お隣、おは、一本の根がなかつたのに、松葉にも下り、遠い親藉へも分けてやつたさうだのに、家では三本も出来たのだから、少しは合へさせても、良さうなものだ」と言つて、ぬたりました。「其水もやうだ」と考へた波女さんは、おさいのを五つ六つ切つて、近所へも分けて、子供達にも、考へて合へさせました。（ち事にし）そして、一口合へて見ますと、其の苦い事と言つたら、蕪酢ホカ此ではありません。いくら吐いても吐いても苦いので、水を飲むやう、舌を洗ひやり大変な騒ぎになりました。其れで

直らないで、家中、風邪でも引いた様に熱を出して、寝てしまひました。

「何を合はせたのだ。此人な苦い物を飲んで、死ぬ所だつた」と、近所の人は、怒つて来ましたが、来て見ると、家中の者が、「うん／＼」と、唸つて、寝て居るので、皆其儘黙つて帰へてくまひました。

「此水は、きつと早く取つた所だ」と考へて、残りの瓢は、霜の降る頃迄、残して置きました。そして、どつさりお米も取らうと思つて、大きな桶も、幾つも造くりました。波女さんは、湯大煮に成る事を考へては、歯の無い大きな口を開いて、た／＼笑つては、昔々で居ました。

或日、もう、待ち切れないと、泣いて、残りを取つて来て、切つて見ると、何も是も、重いの許りでした。大喜びで、大きな桶の中へ明けて行きました。明け終つて覗いて見ますと、どうでせう。蛇や、蛙や、百足や、蜥蜴や、蛇など、其れは其れは、気持の悪い物許が、

して居ました。

「あつ」と叫ぶと、其水が一度に龍衣の類いつて来て、刺したり噛付いたり散々を目に合はせました。

到頭、波女さんは殺されてしまひました。

宇治拾遺物語卷之三すめ報恩事 に據る。

三月七、三明記

猫 また

比叡下より花が身に染みまは、平安の都は猫またの
語で賑はした。

「奥山に、猫またと言ふ怪物が、出て人を食ふぞうだ」と言へば、
噂が噂をきいて、猫またに、取著せられたなり。若くは雄猫があ
つた場合は、雄を捕へて殺す。雌猫だつたら、雌を捕へて殺せば治
る」と、氣の利いた語をする行者もあり、「猫または山に限つた
話では無い。人里でも、年を経て異様な体となつて来ると人
を取るので」とも物知處に語る波々も居た。

或日、一條の行初寺の邊に住んで居た、某の阿彌陀佛と言ふ
法師が、猫またの話を聞いて、「其水は恐ろしい事だ。供も無く
一人歩きする身は、氣を付けなければならぬ」と思つた。

此れ以来、世間の猫が氣に掛つて仕方がなかつた。ともすれば

路傍の雜草が猫またに見えたり、落葉を踏んではおぼろしく
音に驚き、飛が退く事もあった。

深更まで遊戯に興じた或夜、大分暗いので猫または出るか
も知れぬ。と暗き中、一人帰へつた。家近くの川の端に差
掛ると、案定、猫またが、小蔭から追つて来た。無気味な生
暖さを足元の辺に感ず、ぞつと周章して、駆け出すと、背後
から飛が著り来た。頸の所へ喰着かるとするやうい。
法師は肝を潰して、逃げようとしても足腰が立たず、気がも
れ、川へ勢で落ちた。

「助けて下火。猫まただ。」と叫び叫んだ。

守々の家から、人々が松明を燈して走つて来て見ると、此の近く
の見知りの僧だつた。「此水はどくろい、と」抱起して助中
見ると、遊戯に賞を得て、扇や小箱を懐に入れて居る

のに、水に浸つてしまつたのだつた。

丸粒に一生を得た恰好で、すく／＼家に入居。

一日頃、飼ひ馴れた犬が、闇夜であつたに、例はず、主
へりとも嗅着けず、飛が付いて来たのだつた。

徒然草 八十九段より

三月十日記

田舎の茶人

江戸葛飾。片田舎に、権兵衛と言ふ村長が、ありました。

或年の春、伊弉力大神宮へ太々神樂を上げ、五穀豊饒家内安穩

願ふよと思つて十三人の村人と共に、何某の法師おほの家を尋ねて泊りすと、

法師は遠東の客とばかりに珍らしい湯匙を取出して、搦て成して下れ

たが、最後に「昔年の芳に報ゆる為に世清茶を一服立てませ」と申しま

た。此れも田舎への土産の種になると思つて、言はれる儘に安んじ

て飛石傍に茶室へ行きますと、老樹に松杉を植ゑ込み、泉水を燈

籠した路地の閑寂さは、今も庭園の美を盡くして居り、薄れ日を白壁

受けた茶室の床に狩野の山水が珍らしく、爐には松風の音かき

て、村長を物々しうの村人の座に着きますと、法師は灯籠に

の心を満遊無く配りながら、茶を立て、先づ権兵衛の前へ出

て、田舎者の事であるから、茶道の心得は少しも無いので、困惑

をいたしました。村長

と言ふも少し宛飲んで腹に廻すのが作法であると聞いた事があったが一杯
りの此の茶ではとても十三人には廻り切れない」と言つて自分一人で飲んでしまふ
他の人にも鼻を明かせれば済まないとも考へ、思案に暮れまゐつた。
長の身で今更其の飲み方を聞かぬ口惜しい事であると思ひまゐつた。

御師はもと少しと思つてか、先程から出さず置いた口取の菓子と村長の前
差出さず、「どうぞ召上つて下さい」と申しまゐつた。お長は茶碗を無意識に取
上げ下居る事に気付き「はっ」と言ひました。御師は「茶を飲む」といふ
言ひ、又自分の前に置きました。御師は静かた茶碗を取り綺麗に濯
一服立て、村長の前に出さず、粗茶を取取り下さい」と言ひましたので、今更其
を取つて合せて茶も残さず飲んでしまひ、又前に置きました。御師は更
を取つて本の様に濯いで茶を立、村長の前に置きました。

村長は愈々固くなつて、途方に暮れまゐつたが、是れ以上飲めぬと思
ひ、「物はもう海山です」と漸くの思ひで申すまゐつた。「其れでは次の方へ御
下さい」と言はれたので、冷汗を拭ふ事が出来まゐつた。

十三人の村人は、村長の為た通りに一服飲んで、菓子を含め、又一服、
遠々の態で座敷へ引き返へまゐつた。そして作法を知らなくて一時はと
すかた心配したが、権兵衛さんの為る通りに為れば良からうと思つた事や、
が切れて堪えられなかつたのに、十三人が飲み終る迄待つて居なげれなかつた
た事をと話し合ひ、若くは昨朝も茶の接待があつたら何うい様」と心配
たが、相談の結果、翌朝は未明に起きて帰國の途に著く事にして休ま
す。村に帰へつてから、「茶は飲む事より味ふ事が大切、何故牛前の侍様
先ほどの餘裕が無かつたものであつたか」と、長者に笑はれて秘言入つたと言
とす。

雲萍雜志に基づく 二、四、二、三 明記。

道場法師物語

昔、船名余澤語田宮御宇天皇の御代に、尾張國愛知郡片藪里に
農夫が住んで居ました。

或夏の一日、田に水を引かんと思つて、田圃迄行きますと、俄に夕立とな
りました。其處で、傍の大木の根元に腰を下ろし、金の杖を突っこ、雨を
けし居りました。

ひかり、と無気味な青白い光が差し込むと、程ど同時に、かろ／＼とや
と荒涼しい音がしました。農夫は金の杖を大地に突立てた儘思はず
び止りました。雷が落ちたのです。氣を沈めて見ますと、雷の子が農夫
の前に突き突いて平伏して居ました。農夫は再び驚きました。お前は何か
たいと尋ねて見ました。雷は、「私は貴方の金の杖の影陰で、岩角に落ちた
たなつて済みました。其の御禮に、子供をお授け致します。私の舟に桶の船を
作り、笹の葉を敷いて海に浮かべて下さい。」と言いました。農夫は言はれた通り、

てやります。雷は、黒雲を靡かせ、やがて天に昇って行つてしまふ。

其後、農夫の家へお産があらうと云ふが、生れた赤子の所へ時々戯れ来て乳を飲ませて、大きくなって居る事が解りました。生れて十三の折には、最早一人前立派な田か子と見誤る程でした。

其の當時、朝庭に、すほら〜大方の王が居ると言ふ噂があらうと云ふ。王は、
「よく、都に上つて、王を尋ねて、方試をしよう」と申して、都に向つて出立した。御所に着いて、椅子を調らうと見ますと、池所の東北の角の別院に、大方の王が住んで居る事が解かりました。

其の疑ひがかりたる春の二日、王は夜、隅の方にあつた、八尺四方もあると思はれた大石を、池門の所へ持て行つて立掛けて、人が出入り出来なくなつたと見ると、せうと院の中へ引籠つてしまひました。

「名に聞えた大方王とはあの人の事だ。一つかうかつてやりう」と考へた臺は、其の日に、人に氣附かれなう様にして、其の大石も、本ある所より高一尺許、籠の方へ近づけて

置っておきました。お皇朝王は、此を御覽なす、烈火のやうにお怒りになり、再び大石を池門の所へ持つて行かれました。

其のお皇朝王、今又又三尺許も此方へ寄せて大石を置かれ、居てもありませんか。王は

尚更お怒りになつて大石を池門の外へ出さうと云ふに、お怒りなりました。お水でも其のお皇朝王

更に四尺も籠に近づかして、大石が置かれ、居ました。此の分では、明朝は八尺、其の

次ぎには十六尺、お水が三尺と近づかれました、院の中へ大石が持ち運ばれた時、其の

と思ふと、滾石の大玉もあつたりして、大石を動かす気にも成りません。良く見れば

すと、大地の上に三寸許も踏込め、足跡が、點々と存するは、ありませんか。近頃、

池所の邊をうろつて居る臺の件、違ひないと思ふ附かれますと、又、腹立たうと、

つて来ました。池門の外へ出て、池邊にならうと、其のみすほら〜臺を、掃蕩の臺

立つて笑つて居ました。王は益々立腹されて、其の臺を捕へて、因は合はせ、

うとお怒りになり、追ひ掛かりました。

臺は、垣根の上をぐる／＼廻つて逃げますか、どうして捕へられませんか。王は

津の舟に渡りて、今日迄、自分は日本一の大力持と信じて居たが、
到底及ぶものではないと、御や、おまうて、童子を捕へて、怒めやうと考へ、
開も存人、童子は、大前夜、元興寺の成僧の童子となり、
其坂、元興寺には、奇怪な事件が續いて居ました。其坂は、夜毎に鐘堂の童子が
一人づつ、満ちて無くなると言ふのを、為に寺は上も下への大騒ぎをいたしました。大前夜の町も
夕方になると、家々は固く戸を閉めて、心配して居ると言つた有様でした。

其處で、此の童子は、此坂は鬼畜、仕業に相異なる。一つ退治する、人々の火を放つて
やううと申して、衆僧に相談して、鐘堂の四隅に燈火を置き、鬼畜を捕へた。童子
は燈火の下に体を見居りよと言ふ計畫を立てました。

童子は、其の夜唯一人で鐘堂の中に入り、鬼畜の現れぬのを待ち構へて居ました。夜十
時は暗闇の中に丑三時に近づくて行きますと、ぎいと音がして、衆僧が少し開けられたか
と思ふと、大鬼が現れ込みました。童子は、一時は驚つたりしましたが、大鬼は衆を其儘に
置いて、行つてしまつた。童子は、今交現れたなら、捕へてやうかと、思つて、

隠れて固唾を飲んや待て居りました。

派と一陣の生暖い風が吹き渡つたを思ふと、長い影を振動した悪鬼が現れ、
吹き乍ら逃げやうと、狂ひ廻りました。然し童子は、影を固く握つて、
早く燈火を照らせよ。と叫びました。其時、控の衆僧
は、鈴の物凄さに、捕まてを料め、はかり、近附かるとする者もありません。鬼は死物
狂ひで、逃げやうと暴れ廻ります。童子は大力を出して、一歩一歩大鬼を鐘堂の中へ引
き入れました。

東の空が微かに白らぶ頃、終りに鬼の髪が抜け、鬼は呻吟き乍ら一散に逃げ
て行つてしまつた。夜が明け下から、血痕を便した手取で行つて見ると
大鬼は、往遠くない、無縁佛の墓の隅に倒れて死んで居ました。
悪鬼が退治されたと言ふので、奈良の人々は、安心して眠る事が出来たやうになりました。

童子は、今おまうて、童子を捕へて、怒めやうと考へ、開も存人、童子は、大前夜、元興寺の成僧の童子となり、其坂、元興寺には、奇怪な事件が續いて居ました。其坂は、夜毎に鐘堂の童子が一人づつ、満ちて無くなると言ふのを、為に寺は上も下への大騒ぎをいたしました。大前夜の町も夕方になると、家々は固く戸を閉めて、心配して居ると言つた有様でした。其處で、此の童子は、此坂は鬼畜、仕業に相異なる。一つ退治する、人々の火を放つてやううと申して、衆僧に相談して、鐘堂の四隅に燈火を置き、鬼畜を捕へた。童子は燈火の下に体を見居りよと言ふ計畫を立てました。童子は、其の夜唯一人で鐘堂の中に入り、鬼畜の現れぬのを待ち構へて居ました。夜十時は暗闇の中に丑三時に近づくて行きますと、ぎいと音がして、衆僧が少し開けられたかと思ふと、大鬼が現れ込みました。童子は、一時は驚つたりしましたが、大鬼は衆を其儘に置いて、行つてしまつた。童子は、今交現れたなら、捕へてやうかと、思つて、